



人を背中に乗せて走ったり、すきを引いて畑を耕したり。馬は昔から私たちの生活に深く関わってきた動物です。馬の習性や、どうすれば仲良くなれるか、動物が大好きな十勝のこども記者が、帯広市内の乗馬施設を訪ねて聞きました。

馬の習性 生かして訓練

こども記者見ぶん録

こども記者は帯広市・つつじが丘小5年の藤森貫太さんと芽室町・芽室西小5年の浦野稀后さん。2人とも動物の取材に興味がありました。

訪れた施設は「ヒロユキモチダホースマンシップ」(富士町)。2016年のオープンで10頭以上の馬を飼育し、乗馬やひき馬体験ができます。2人が中に入ると、

小型の馬「ポニー」のショーが開かれていました。

ステージに現れたのはホーストレーナーの上江洲かなさん(26)と、めすの「ポピー」「フラッピー」。

2頭はトレーナー歴4年の上江洲さんの言葉や身ぶりに従い、お座りしたり、お回りしたり。2頭いっしょに高さ約60センチのバーを飛びこすと、2人は「わあ」と歓声

を上げました。

牧場では、馬の習性を生かす「ホースマンシップ」と呼ばれる訓練方法を取り入れています。「2頭のどちらが群れのリーダーだと思う?」。上江洲さんが問題を出

しました。答えはポピー。馬は経験のあるリーダーが安全を考えて群れの走る方向や速度を決めるのです。2人がえさをやるとポピー

が他の馬を追いはいり、リーダーのふるまいを見せました。

続いて2人は、馬が夜を過ごす厩舎へ。馬が寝ても痛くないよう、わらがしかれています。えさ

適切な接し方で安全に仲良く



①バーを飛びこすポニーのラッピー(手前)とポピー(奥)を見つめる、藤森貫太さん(左)と浦野稀后さん(左から2人目) ②いっしょに上江洲さんが見守ります



③ポピーといっしょに歩く浦野さん(手前)。上江洲さんが見守ります



まなぶんデジタルには、さらに多くの写真があります。7月31日夕方から見られます。

の牧草もあり1食分は2〜3キロ。藤森さんは「馬にとつては大切なご飯。いっぱい食べるんだな」と感心しました。馬に人間の言うことを理解させるには「リーダーは人間だ」と思ってもらふ必要があります。ブラッシング体験ではブラシで毛並みを整えながら、動くこととする馬に合図し、その場で止まるよう指示しました。最後に浦野さんが「馬と仲良くなる秘訣は?」と質問すると、上江洲さんは「どんな風に仲良くなるかによります」と答えました。馬に好かれるのとリーダーとして認められるのは違います。馬は力が強く、人間がけがをしてしまつ場合も、馬と人が安全にかかわるためには、適切な接し方が大切なのです。

思いやり持つこと大事

藤森 貫太さん

帯広市・つつじが丘小5年



ポニーショーではトレーナーさんの合図に従い馬がハードルをこえたり、お手をしたりしていました。息がぴったり合い素晴らしいかったです。馬に伝える合図には、たくさん種類がありました。止まる合図は「ウオー」。口で音を出すと進んだり、とんだりしました。馬にもこんなことができるんだと、おどろきました。スタッフのみなさんは馬が大好きで、馬の気持ち大切にしている様子伝わってきました。優しく声をかけたり、なでたりして馬も幸せそうでした。ダメなことも教える聞き勉強になりました。馬も人間と同じ。思いやりを持って接するのが大事だと思いました。

人との違いにびっくり

浦野 稀后さん

十勝管内芽室町・芽室西小5年



今回の取材を通し、びっくりしたことが三つあります。一つ目は、馬が速く走れるように足の指が進化して中指だけで立っているということです。二つ目は、野生の馬が、あまり横になつてねむらないということ。すぐに敵からにげられるよう、立つたままねむるそうです。さらに、馬と人間とはものの見え方が違うと知りました。障害物を飛びこす時は、きよりや立体感を確認できるよう、必ず馬の正面に物が来るようにしてジャンプするそうです。取材を通じて馬がさらに好きになりました。学びを生かし、馬とコミュニケーションを取れるようになりたいです。